

「パンセ」の一側面

― 自然の探究をめぐって ―

山 崎 信 二

キリスト教弁証論のためのノートである「パンセ」において、パスカルは自然の探究つまり自然科学に対してどのような態度をとっているか。それを我々はどのように解釈すべきか。更にその護教論は科学者パスカルの立場とどのように関わっているか。こうした問題を明らかにしようとするのが我々の目的である。

(I) ジャンセニスムは自然の探究の原動力である好奇心を人間の三つの邪慾の一つとして退ける。三つの邪慾の説の源は「おおよそ世にあるものは、肉の慾、眼の慾、生の驕りなり。libido sentiendi, libido sciendi, libido dominandi」(458)とパスカルが訳している。ヨハネ第一の書第二章一六節である。この説は原罪の教理と結びつき、彼の護教論に於て軽視できない要素となっている。パスカルにとって邪慾は、墮罪の結果「第二の本性」となり、人間と神との断絶をもたらしているのである。「私は、傲慢、好奇心、邪慾の深淵が私のうちにあるのを見る。私から神への、私から義なるイエス・キリストへの道はまったく存在しない」(553)。断章460ではこの三

つの慾の区別が少し展開した形で述べられており、いわば「生の驕り」が原罪に本質的につながることが暗に示されている。「肉のことがらにおいてはもともと邪慾が支配する。精神的なことがらにおいてはもともと好奇心が支配する。知恵においてはもともと傲慢が支配する。財産や知識が誇りの対象になりえないというのではない。ただそれらは傲慢が支配する場所ではない。……傲慢の本来の場所⁽¹⁾は知恵である。」これによってみると護教論者パスカルは、本来「好奇心」の場所であり「傲慢の場所」ではない学問・知識を危険なものとはみていないと言えるかもしれない。そうはいってもパスカルは、好奇心を「魂の病氣」と呼び「われわれには何ら関係がなく、知ることの無用な、人々がただ知るためにのみ知ろうとする自然の秘密の探究も、そこから由来する」と言うジャンセニスムから離れようとはしていない。彼は「人間の大きな病いは自分の知らない事物についての不安定な好奇心である。かかる無益な好奇心のうちにいるよりも、誤謬のうちにいるほうがまだましである」(18)

とさえ言う。

無信仰者を前にしたパスカルは、人間の運命 (*destinee humaine*) に——勿論根源的な意味に於ける運命に——その関心を向けさせようとしていたのであり、激しく無信仰者に迫ってこの点に無関心なのは全く良識を缺いた人間だと言いきる護教論者パスカル (Cf. 194, 195) が、この点から人間をそらすものを認め難いのは理由のないことではない。彼は言う。「人がコペルニクスの意見を深く究めないのはよいと思う。しかしこのことは別である。魂が不死であるか否かを知することは、生き方の全体にかかわる重大事である」(218)。ここでパスカルは、地動説が信仰の真理に反すると迄言おうとするのではないであろう。地動説が確実な真理とわかれれば、彼はそれを認めるにやぶさかではないであろうが、ここでは「コペルニクスの意見」としていることからうかがわれるように、彼は地動説を実証的根拠がまだ不十分な仮説としてみている。我々はむしろパスカルのことばが、「地球と太陽のどちらの一方が他方のまわりを回っているのか、それは全くどうでもよいことである。一言で言うならば、それはくだらない問題である」というカミューのことばに、三世紀へだてて反響しているのをききとるべきである。パスカルが言いたいのは、人間の運命の問題が自然の探究以上に人間にとって重大事であるということなのは、この断章の後半において明らかである。

パスカルは学問・知識の空しさ・無益さを語る (67) (74)。特に「われわれは哲学全体が一時間の労にさえも値するとは思われない」(76)。ここで「哲学」は自然哲学乃至自然学を指すとみななければならない。なおパスカルにとって学問とは自然科学である。

断章 6 において「哲学」が空しいとされるのは、それが人間の運命に救いをもたらさないからであろうが、この断章の前の部分から察せられるように、ここで批判の対象になっているのは厳密にはデカルト自然学であることも注意しなければならない。デカルト自然学に対する態度を含めて自然学者パスカルの立場が、「パンセ」ではどうなっているかが我々の問題となるからである。この断章の冒頭で「大まかにこう言うべきである。『それは形状と運動から成っている』と。なぜなら、そのことは真であるからである」と言うパスカルは、デカルトの機械論的自然学の基本原理を認めていると言えよう。機械論的自然学の一つの帰結である動物機械論については、デグリッブの言うように、「パンセ」のテキストによってはパスカルがそれを受け容れていたかどうかを結論することはできないであろう。だが別の自動機械即ち人間の身体に働きかける習慣が、護教論の重要な原理になっているのは否定できない (245) (246) (247)。このようにデカルトの機械論的自然学の影響ともいえるべきものが「パンセ」においてみられるのであるが、パスカルはデカルト自然学をそのまま受け容れるには余りにも実証に徹した自然学者であった。彼は「自然学における一連の実験研究において、ほかの誰よりも方法的、実証的、非形而上学的な態度を貫いて、機械論的自然観を体現した」と言えるであろう。だから経験による実証をはるかに越えた仮説により宇宙の形成を説明しようとするとき、デカルト自然学も実証的機械論者パスカルの目に笑うべきものとなる。断章 6 には先の引用箇所後に「けれどもどんな形状どんな運動であるかを言い、機械を構成してみせるのは、滑稽である」と書かれている

が、ここでパスカルが「許すことのできなかつた」デカルトの宇宙進化説がそのドグマチスムの故に（宗教の観点からそれが「無用な」故でもあるが）批判されていると考えるべきであらう。

「学問をあまり深く研究する人々に反対して書くこと。デカルト」(9)とパスカルが言うのは、彼がデカルトの宇宙進化説を反宗教的とみなしているためかもしれない。しかしこの断章を断章⁸と同じ線上で考えることができる。つまりここに表現されているねらいの根底には、自然の探究を空しいとするジャンセニスムの見方があると共に、形而上学にその基礎をおくデカルト自然学のドグマチスムの批判がある、と言い得るのである。

以上みてきたところからわかるように、体系化を急がず実証に徹した自然学者パスカルの立場によってその断言を柔らげ得る場合もあるが(76)(79)(218)、ともかく自然の探究に否定的な「パンセ」の断章があるのは否めない。そしてジャンセニスムの色彩のつよいそれらの断章が、自然の探究よりも人間にとって緊急な人間の運命の問題に、無信仰者の関心を向けさせようとするパスカルの意図に副っているのは否定できない。

(II) パスカルは人間の条件を明らかにするのに、自然の探究の結果である認識を出発点としていえると言えらる。「パンセ」の「二つの無限」に関する断章¹⁰の冒頭には、パスカルの手によって消されてはいるが前置きというべきものが書かれており、そこには「自然的認識」がパスカルの出発点であることが示されている。そしてこの断章は、自然の探究の結果パスカルの時代にあらわれ出た無限な宇宙と人間との不均衡を明らかにしようとしているのである。それ

がこの断章につけられている標題「人間の不均衡」の意味であらう。人間は宇宙の二つの「深淵」即ち大なる無限と小なる無限の中間に、定まった位置をもたず浮動している存在（中間者）である。

人間は二つの無限のどちらにも到達する能力をもっていない。従って事物の究極の原理にも事物の終極にも達することはできない。更に宇宙の無限な全体とその諸部分とは相連関しており、一方を知らずに他方を知り得ない。ここからも人間の知的無能が由来する。このようにこの断章には、「真空論序言」からひき出される科学者パスカルの樂觀的相対主義の認識論をいわば裏返しにした、悲觀的相対主義の認識論が展開されているとも言えよう。ここでは「序言」におけるように人類全体の進歩という觀念が入ってこないため、認識が部分的・相対的であることが、認識の限界、認識の無能力となっていると言えよう。しかしここでパスカルは、認識論を展開しようとしているというよりは寧ろ、無限な「自然のこの辺鄙な一隅に迷いこんだ」人間存在のおかれていいる根源的条件即ちその中間者性をあらわにしようとしているのであり、人間が完全な真理を確実に所有せんとする熱望をもちながら、人間の条件がそれを許さないという矛盾を示そうとしているのである。この断章には、後に触れるように、人間が「神によって造られたものであり神の恵み無くしては無に等しきものでありながら、恵みの賜物を逆用して、自ら神に成ろうとした僭越・叛逆の振舞いの現われ」である「悪しき有限性」から、神の愛に安住する人間の「真の有限性」に立ち帰らそうとするパスカルの深い意図をみるべきではなからうか。この断章にばらまかれている道徳的考察は、自然の探究から人をそらそうとし

ているようにみえるが、そこに上のパスカルの意図が少しつよく表現されているとみれば、それらは我々にとつても納得し易いものになるのではなからうか。パスカルは言う。「このことが（人間という中間者の状態が）よくわかったならば、われわれはそれぞれ自然によつて置かれた状態のまま、安んじていられるであらうと思う。われわれに当てがわれたこの中間は、つねに両極から隔たつてゐるのであるから、人間が少しばかり多く事物の理解をもつてゐるからといって、何ほどのことがあらう？　彼がそれをもつてゐるとしたら、少しばかりさかのぼつて事物を捉えるだけのことである。彼は依然として、終極から無限に遠く離れてゐるではないか？　十年長く生きたところで、われわれの生命の持続は、永遠のうちにあつてはひとしく微細なものではないだらうか？」

(Ⅲ) 二つの無限という深淵によつてわれわれの探究をはばむ自然は、その創造者について語るであらうか。機械論的自然観を受け容れた自然学者パスカルは目的因を排するから、それを用いた神の存在の自然学的証明を認めない、と原則的に言えるのである。一步譲つてパスカルが神の自然学的証明一般の論理的な価値を一応認めたとしても、その護教論に於ける有効性を認めていまいと言わねばならぬ(242)(243)(244)。

パスカルは科学が変りゆき進歩してゆくものであることを知っており、彼以上にこの認識を表明する資格のある者は少ないであらう。自然についての知識によつて、特に自然の秩序についての単なる先入見によつて、神を証明しようとする目的論的な企ての危険なことをパスカルはよく知つてゐた。しかも当時彼の目の前には、い

くつかの具体例があつたのである。十七世紀初頭には偉大な科学上の発見が相繼いだが、いろいろな分野で十七世紀は長いこと古い科学体系に忠実であつた。科学を宗教に仕えさせようとする主にユマニストの科学的護教論があらわれたが、それらは証明を装つた安易な描写を好み、古い科学に、近代科学という意味ではその名に値しない科学にわずらわされてゐた。パスカルが神の存在の自然学的証明を信用しないという事実には、こうした護教論に対する反撥をみることができる。安易な自然学的証明は「われわれの宗教の証拠がきつめて頼りないものであると彼ら（無信仰者）に思わせる結果になりかねない」(242)。当時のいわゆる科学的護教論において「物理的な事物を精神的に……論じる」(72)ことは普通であつた。そして聖書の正典の著者達が「決して言わなかつた」「真空というものは存在しない、ゆえに神は存在する」(283)といふことをグロチウスは言つてゐるのである。

それだけではない。目的因を用いる神の自然学的証明は、パスカルの時代における自然観乃至宇宙観の大きな変化によつて、人々の意識の中で意味を失おうとしてゐたのである。勿論いつの時代にも恩寵によつて信仰を与えられた者は「自然の造化」による神の証明を難なく受け容れるであらう。信仰者にとっては「大空や小鳥が神を証明する」(244)であらう。しかしパスカルの時代の「大多数の人々」、厳密に言えばパスカルが護教論で相手とするリベルタン達にとつて宇宙は沈黙してゐるものである。それとむかいあつた時の怖れを彼は見事に表現してゐる。「この無限の空間の永遠の沈黙は、私に恐怖をおこさせる」(206)。この沈黙した無限の宇宙を前にして、

人間は自分の置かれた絶望的ともいえる状況を自覚せざるを得ない。「沈黙した宇宙を見つめるとき、人間が何の光もたずただひとり放置され、いわば宇宙のこの一隅に迷いこんだように、だれが自分をそこに置いたのか、自分は何をしにそこへ来たのか、死ぬとどうなるかを知らず、あらゆる認識を不可能にされているのを見るとき、私は……恐怖におそわれる」(693)。それは時間と空間の無限の中に「のみこまれている」この時、この場所に、一箇の人間存在が置かれていることの不可解さの自覚である(805—Cf. 19)。こうした人間の状況を知りながらそこから脱出を求めようとはしない者達、「気晴らし」(divertissement)にはしり神を求めようとはしないリベルタン達に対して、パスカルはその説得術を駆使するのである。その際、無限な「宇宙のこの一隅に迷いこんだ」、「自然のこの辺鄙な一隅に迷いこんだ」人間存在の不安は、原罪の結果「迷っている」(427) (431)、「彼の真の場所から失墜したままそれを再び見いだすことができないでいる」(427) 人間の不安につらなっていくであろう。ところでこうした怖れや不安は時代の刻印を帯びており、機械論的自然観の必然的な結果であったと言えることができる。パスカルの時代は機械論的合理主義の勝利の時代であった。アリストテレス自然学の想像された階層秩序をもつ空間に、機械論的自然学の空間がとって代った。それはあらゆる道德規範の外で考えられた、善悪に無関係な空間であり、到る所が同一の法則に支配され、未来の技術的達成を秘めた対象としての空間であり、等質的であり人間的なものを何も含まぬ故に無限な空間であった。この無限な幾何学的空間の中で神は語らない。そして今まで神のみの属性であつ

た無限という性質を宇宙にもなることになったのである。それは人間の力の可能性をひろげることであった。しかし一方で、人間は宇宙の中心としての自分の場所を失った。人間は、自分と何らの釣り合いをもたず、自分を「おしつぶそう」とする宇宙、神を語らず、何の指針をも与えぬ宇宙の前でおののかざるを得ない。それは人間と自然との断絶による不安と言えようが、この不安を表明することにおいて、パスカルは時代の重要問題を意識していたことを示している。だが「パンセ」の中で言い表わされている、この沈黙した無限の宇宙に対する怖れはパスカル自身のものであろうか。筆者はベガン¹³⁾と共に、それは過去においてパスカルのものであったかもしれないが、護教論を書くパスカルのものではないと考えたい。沈黙した宇宙に対する怖れは、断章194にみるように、護教論の虚構の對話者にたくされたものであろう。その對話者は断章226において、自然が神を示さないことを、曖昧にしか示さないことをはつきり語っている。結局自然は神を隠す帳である。

パスカルが断章226で、神の自然学的証明を無効なものとして退けるのも、聖書が神を「隠れている神」として語っていることを示すためである。「隠れている神」(イザヤ書四五章一五節)という教理は、パスカルの護教論の第二部、聖書によるキリスト教の史的証明の部分を支配している。キリスト教信仰の真理は直接的には証明されず、歴史上に現われた神のことばによって保証される。しかしその神の啓示のしるしを示す歴史的証拠は曖昧である。それは神が「隠れている神」だからである。神が隠れているのは、人間が原罪によって神に値しなくなっているからである。人間は盲目の中に置

かれていますのであるが、それと同時に人間の最初の本性とイエス・キリストの贖罪によって人間は神に到達することを許されています。⁽¹⁴⁾

そして「神は心の底から神を求める人々には明らかに現われ、心の底から神を避ける人々には隠れたままでありたいと欲したので、神を求めている者には見ゆるように、神を求めていない者には見えないように、神自身のしるしを与えたのである。」⁽⁴³⁰⁾かくて、キリスト教の真理を認めるか否かは、人の心情のあり方、意志のあり方にかかっている。パスカルの護教論の第一部は、読者に神を心から求めさせることを目指してきたのである。⁽¹⁵⁾

結局「自然によって神を証明することは、弱さのしるしである」

⁽⁴³⁰⁾と言っても過言ではないであろう。神の存在の自然学的証明は、形而上学的証明と同様、救いに役だたない。「およそイエス・キリスト以外のものに神を求め、自然のうちにとどまる人々は、彼らを満足させる光をまったく見いだすことができないか、もしくは仲保者なしに神を知り神に仕える手段を自分でつくり出すか、どちらかであり、そこからして彼らは、無神論におちいるか、または理神論におちいる」⁽⁵⁶⁶⁾。パスカルにとって、神を証明するものとして受け容れることのできるのは、イエス・キリストによる証明、つまり聖書による歴史的証明のみである。「パンセ」の断章²²には「第二部の序」という標題がついており、最初に引用した部分に続いて次のように書かれている。「神に属する事物をいっそうよく知っている聖書は、神についてそのような論述の仕方をしていない。聖書は反対にかく言う。神は隠れている神である。人間の自然性の墮落以来、神は人を盲目のうちに棄て置いた。人間がそこから脱出

し得るのは、ただイエス・キリストによってのみである。彼をよそにしては、神とのいっさいの交わりは絶たれている。」

(IV) パスカルは一六五五年一月の三週間のポール・ロワイヤル生活を除き生涯を捨てなかったが、その一つのあらわれとして生涯彼は幾何学者即ち科学者であった。(パスカルの場合、幾何学即ち科学と考えてよい。類概念としての幾何学は力学・算術・幾何学を含むものとされている。―「幾何学的精神について」Br.: p. 173)「生涯にとって最も大事なことは職業の選択である」⁽⁹⁷⁾と言うパスカルにどって、幾何学ひいては科学研究は彼の世にあった職業であつたと言っても過言ではないであろう。⁽¹⁶⁾

こうしてパスカルが生涯学問を棄てなかったことと、護教論に於ける学問に対する態度との間に矛盾が生じてくる。⁽¹⁷⁾この矛盾をいかに理由づけるべきか。それは、「パンセ」におけるパスカルの学問に対する態度がどこから由来するかについて、すでにI・II節で触れたところから明らかであるとも言えるが、ここでは先ずそれを違った角度から考えてみよう。

先ず、学問はパスカル自身にとって「傲慢の場所」でないとはいえるであろうか、ということが問題になる。彼が学者として大きな誇りをもち、自分の学問上の成果に強く執着していたことはよく知られている。例えば真空の問題についてイエズス会のノエル神父と論争するパスカルに、またトリチエリの実験の剽窃者として彼を誹謗するこれもイエズス会の一神父に反論するパスカルに、⁽¹⁸⁾優越者の傲りを見ない訳にはゆかない。かくて学問はパスカルにとって「傲慢の場所」ではないと言いきれないであろう。彼は自分の精神

の優越を意識し、またそれが傲慢を生むことも意識していたであらう。そこで護教論は贖罪者パスカルの「救いの手段」⁽²⁰⁾でもあり、護教論を書くパスカルは傲慢から身を守ろうとしている、とドウロは考える。護教論において学問を空しいとするパスカルの態度も、そこから理解されると言えるかもしれない。しかしながら、パスカルが護教論に自己を投入しているのは事実であるとはいえ、ドウロの見方は、彼の護教論が無信仰者の回心という目的をもつことを過小評価した見方であり、そこに聖者伝作者にも比すべき行き過ぎがあると言わざるを得ないのである。

だが「ペンセ」をジェルファニョンのように深層心理学的な観点からみることは許されるであらう。パスカルが確実な信仰をもち、信仰の中に人格の均衡を見出していたことは疑い得ない。しかし護教論において彼が激しく攻撃するリベルタンは、意識下の世界では彼の分身とも言えよう。彼はリベルタンという「彼自身の内的世界の生きた否定」の前で不快を感じるのである。この世にひきつづかれるそのような分身の可能性は存続してはならないのである。そこから、自分の立場に安住しているリベルタンにむかって、この世の悲惨・空しさ、更には学問の空しさを論ずるパスカルの熱心さを説明することができる。またパスカルは、彼の内部に幼時から形成された無意識のかつ藤の意識面におけるあらわれである不安(anxiété)を正当化する過程において、その絶えざる不安を逃れようとし、それが神の前での確かさ、安心の追求、即ち彼の一生を支配した回心となつてあらわれたと言ふことができる。具体的には彼にとって傲慢の源である学問から自らを引き離そうとする態度である。つまり

学問の放棄は、天才パスカルの無意識の罪悪感——その天才のおかげで意識下の世界において自分の地位を高めることに成功したパスカルに当然伴い得る罪悪感——が彼に与える不安を免れるためのもの、いわば自己懲罰の働きをするものとしてあらわれる。そして「ペンセ」⁽²²⁾における彼の学問に対する態度をこの点から説明することもできる。

しかし本質的な理由はやはり別にあると言わねばならない。すでに述べたように、人間の運命の問題の方が自然の探究より無信仰者にとつて重大なことだと護教論者パスカルは考えるから、護教論において学問は脇へ退けられるのである。このことをもう少し立ち入って考えさせてくれるのが断章[93]である。先に引用した断章[6]に示されていた「三秩序」(trois ordres)の説は、この断章で見事に結実している。ここでは身体(物体)・精神・愛(charité)の三秩序が立てられ、第三の秩序がはつきり神から由来するものとなり、各秩序の偉大さと共に各秩序間の無限な断絶が強調されている。この三秩序の説の出発点は、幼いパスカルが父から教えられた「信仰の対象となる一切のものは理性の対象とはなりえず、ましてや理性に従属させ得ない」(Br., p. 11)という格率であると言える。しかしパスカルの場合、理性と信仰の分離は安易な妥協という段階にとどまてはいない。先ずパスカルの方法は学問においても護教論においても、理性の実在者(le réel)への服従に存する。護教論において、『*Le règne des partis*』に基づく「賭」(233)によって理由づけられる理性の服従の必然性に従つて、理性が神の啓示に服従するとき、理性の存在理由は最もつよくあらわされるのである。またパス

カルは、キリスト教の歴史的証拠を理性に反するものとし示すのではない。信仰への道において理性の役割は小さくないと言えよう。⁽²³⁾一方パスカルは愛の秩序に入らしめる信仰が恩寵の業であることを体験している。そこに断絶があるのを知っている。だから彼は三秩序の説において、数学で到達した無限小の觀念から発想を得て、各秩序を、特に愛の秩序と低位の秩序をへだてる無限の距離を強調し、各秩序間の非連続を浮き彫りにしたのである。パスカルの護教論はいわば恩寵との共働により、無信仰者の心情を揺り動かして、自己追求を本質とする自己中心の在り方即ち低位の秩序から、神の愛、イエス・キリストの愛によって生かしめられる神中心の在り方即ち愛の秩序へと転換させることを目指している。この愛の秩序において、神との愛の共同において滅びは克服され、人間の運命に救いをもたらされる。⁽²⁴⁾この護教論の目的に副って、パスカルは三秩序の説において、どのように大きな精神の働きも愛の働きを生むことはできないことを強調するのである。「すべての物体の総和、すべての精神の総和、またそれらのすべての所産は、愛のいとささやかな動きにすら値しない。愛の動きは無限に高い秩序に属する。……すべての物体と精神をもつてしても、そこから真の愛の一つの動きを引き出すことはできないであらう。それは不可能であり、いま一つの超自然的な秩序に属することである。」ここに「パンセ」におけるパスカルの学問に対する態度の深い理由をみることができる。学問は人間の運命の救いとは本質的に無関係な精神の秩序に属するから、護教論では二義的な価値しかもたぬものとして扱われているのである。

(V) 我々は科学者パスカルが結局のところ信仰者パスカルによって否認されているのではないという基本的な見方をとるが、「パンセ」に科学者パスカルを否認するようにみえる断章があるのも否定できない。これをどう解釈するかが我々の主な問題であった。ところで今まで述べたところからも、パスカルの護教論は科学者パスカルの立場と矛盾するものではなく、寧ろそれによって深められていると言えないだろうか。

パスカルの生きた時代に科学の前に新たに開けた無限の世界は、特有の法則に支配された自足的な世界であり、そこにおいて目的因は意味をもたず、結果から原因へという推論の形で神にさかのぼることはない。即ちパスカルの時代に機械論的自然観が成立したのであり、それを実証的に体現したパスカルは、自然と神との断絶を時代の問題として意識していた。デカルトは自然学をコギトの形而上学で基礎づけることによって神とのつながりを保ったが、実証的自然学者パスカルには、また聖書を通して神に出会った信仰者パスカルにはそれはできないことである。パスカルの神は「哲学者の神」ではない。(Cf. 556—Br, p. 581) それは心情の全き変革によって知られる神、「心情に感じられる神」(573)であり、「われわれの唯一の幸福は神のうちにあることであり、われわれの唯一の災は神から離れていることである」(530)と心情に感じさせる神である。(Cf. 534) それは心から神を求める者にのみ、きよめられた心情をもつ者にのみ自らをあらわす神である。この「隠れている神」の教理は、自然が神に通じておらず、寧ろ神を隠す帳であることと矛盾しないと言えよう。自然にとどまる限り、自然の探究を行なう人間

の在り方即ち精神の秩序にとどまる限り人間は神を知ることとはできない。かくて自然の探究はパスカルの護教論において二義的なこととなる。パスカルが「パンセ」で自然の探究を空しいとするとき、好奇心を邪慾として退けるジャンセニスムの影響下にあるとも、また先に述べたような深層心理的な動きに従っているとも言えるだろう。しかし彼の護教論の実践的な性格を忘れてはならない。二つの永遠の間に埋没した僅かな時間——人生——をよく満たさせようとして、気晴らしによって人間の避け得ぬ悲慘から目をそらして生きる人々の無関心を揺すり自己の悲慘を見つめさせ、人間の運命に救いをもたらす神の愛の秩序に導びこうとするパスカルの本質的な意図を忘れてはならない。

護教論においてパスカルは、先ず具体的な生の次元に無信仰者を導き、人間が理性の理解を絶した、矛盾に満ちた存在であることを示そうとする。パスカルは、無限性の故に完全な認識に到達できぬが、その断片を幾何学的精神の厳密さで扱い、部分的・相対的認識に達し得る自然の世界とは違う世界、その事実が觀念に還元し得ない人間の世界に注意を向けさせようとも言えよう。人間的世界には自然的世界とは次元を異にすると言わざるを得ないような事実があるのである。かくて一方に人間の事実がある、苦悩する人類がある。それは多様な不統一な事実であり、そこでは悲慘と偉大が隣り合い、歴史と人間の中に一つの裂け目があることを、この世界が砕けた世界であることを我々に確認させる。そして他方に、秩序を異にするが聖書において示される啓示の事実がある、イエス・キリストがある。そこにわれわれは悲慘にして偉大な神の到来をみ

る。(Cf. 163) パスカルはイエス・キリストの中に人間の条件の完成と救いを、人間の驚くべき表象 (figure) を、この世界に真の統一をもたらすものをみて、この二組の経験的事実の神秘的な一致を強調する。この驚くべき一致からキリスト教の真実について、明証性ではないが一つの確実性が生れてくるであろう。人々は「宗教の認識から私を最も遠ざけるように思われたこれらすべての相反は、真なる宗教に最もすみやかに私を導いてくれたものである」(164) と言うであろう。この事実の一致は、単に護教論の一段階において、人間の矛盾を説明する原罪の教理と人間の悲慘に救済手段をもたらす贖罪の教理によって示されるのみではない。(Cf. 165) それはいわばパスカルの護教論の根底をなし護教論全体を支えている。

人間の事実と啓示の事実の一致があるため、我々が自らの悲慘と罪を自覚するとき、歴史に侵入した神の啓示、イエス・キリストの存在が我々に強く迫ってくる。我々がイエス・キリストとの真の出会いを経験して、勿論この世にある限り不完全な形ではあるが、神の愛の秩序に入らしめられるとき、「世界はイエス・キリストによってのみ、イエス・キリストのためにのみ存在する」(166)。「イエス・キリストをよそにしては、われわれは、われわれの生が何であり、われわれの死が何であり、神が何であり、われわれ自身が何であるかを知らない」(167) と言うパスカルを理解するであろう。

スコラの自然観から機械論的自然観への転換がなされた「科学革命」の時代に最先端の科学者として生きたパスカルは、同時にイエス・キリストの真摯な証人としてキリスト教信仰をいわば考え直し

けならぬ。

- (47) コーランドンによつてこれは問題として成り立たない。パスカルの如き「悲劇的意識」によつて、この世界は無であると同時にすべてであり、この世界に対する唯一の承認できる態度は、肯定と同時に否定という逆説的な態度、「世界内における世界の拒否」(refus intramondain du monde)であるからである。V. Goldmann, *op. cit.*, pp. 58—62.
- (48) V. Pl. (Pascal: Œuvres complètes, éditées par J. Chevalier, Bibliothèque de la Pléiade), pp. 370—391.
- (49) V. Pl., pp. 402—411.
- (50) Édouard Droz: Étude sur le scepticisme de Pascal, Alcan, 1886, p. 272. — Cf. Ibid., pp. 350—361.
- (51) V. Lucien Jephagnon: Le Caractère de Pascal, P. U. F., 1962, pp. 237—240.
- (52) V. Jephagnon, *op. cit.*, pp. 289—293.
- (53) フランシム第九号「パスカルの護教論における理性、そして心情」参照。
- (54) Cf. Jacques Chevalier: Pascal, Plon, 1922, pp. 314—316.
- (55) 波多野・前掲書七章で、愛の共同と時間性の克服が宗教哲学的に論じられてゐる。
- (56) V. Lucien Jephagnon: Pascal et la souffrance, les Éditions ouvrières, 1956, pp. 117—119, pp. 146—152.
- (57) Henri Lefebvre: Pascal (Nagel), *passim*.